

# 「須永の話」の構造

—『彼岸過迄』（漱石）についての考察

千 石 隆 志

## 1

「彼岸過迄」は七話から成る短編連作という形式である。全体の要を成す、その第五話「須永の話」（全三十五章）に限定して論を進める。友人の田川敬太郎に対して、須永市蔵が自己を語る「話」である。市蔵と千代子との間に、急に高木という男が介在することで、市蔵の心が波乱含みになる。闊達で解放的、社交性に富んだ高木は、いささかも品格を落とすことなく、忽ち千代子の母と妹、さらには市蔵の母などをも交えた避暑地の中心人物となる。容貌といい、会話術といい、その他、なにをとつても市蔵は彼には「及ばない」。彼は光であり、自分は影にすぎぬ。市蔵は高木に対して、ほとんど生まれて初めてという強烈な「嫉妬心」を経験する（十七）。この「嫉妬心」は「千代子が原因」であつて、彼女が存在しなければ作動しない。しかも彼女は、市蔵からすれば、「自分の所有でもない」し、又、「所有にする気もない」のだから、この「嫉妬心」には「存在の権利」がなく、抑圧しなければ「自分の人格に對して申し訳がない」わけだ。市蔵のそういう思想（考え）にもかかわらず、彼のその感情は消えず、彼は人知れず、「腹の中」で苦悶をつづける。

「嫉妬心」は確かに自覚する。しかし、「いまだかつて微塵も僕の胸に競争心は萌さなかった」、と市蔵は言う。千代子の意は、自分にあるのか、高木にあるのか。「どっちに動いても好い女なら」、「切ない競争に価しない女だとしか」市蔵には思えない。現に彼からの競争心の発動はない。しかし女を挟んでの高木への嫉妬心は鋭く刺激を受ける。とすれば、女（千代子）を獲得しなくてもいいが、女を喪失することは絶対に我慢できない、そういうことと断ずるほかない。市蔵に存在するのは、女を失うことへの恐怖である。それは消極的な形式をとった、女への強烈な愛ではないか。

避暑地鎌倉での一行の舟遊びの最中、高木のいる方を暗示しながら、「あっちの方が広くって楽なようだから、行っちゃどうだ」、と市蔵が言ったところ、千代子は「何故、此所にいちや邪魔なの」と言つたまま、彼のところから「動こうとしなかった」。誰に意があるのかわからぬ女と認めながら、彼の胸にはそのとき、「一種の嬉しさが閃めいた」。「口と腹とどう裏表になっているかを暴露する好い証拠」、と市蔵は自覚せざるをえない。「口」、すなわち思想（考え）と、「腹」すなわち感情（いわば本心）との不一致。これは或いは平凡な真理にすぎない。だが、人を苦悩させるには充分すぎる。

競争心は断じてない、市蔵は繰り返す。しかし千代子と高木との「三つ巴」（二十五）の渦中に身を置くかぎり、動いてやまない自己の心がある。それは自己の統御を超えて生動する「怪しい力の閃」（同）である。その「力」の開示を回避すべく、彼はひとり鎌倉を去る。そういう自分を、彼は次のように評する。

僕は強い刺戟に充ちた小説を読むに堪えないほど弱い男である。強い刺戟に充ちた小説を実行する事はなおさら出来ない男である。僕は自分の気分が小説になり掛けた刹那に驚ろいて、東京へ引き返したのである。

その覚悟とは裏腹に、市蔵は帰りの車中で「裂き棄てた」はずの「小説」のつづきを、「色々に想像したのである」。月のある磯辺で若い男と女が相互に激し、しかし終には静かな和解へといたる。あるいは、二人の若い男が砂の上で意味のない口論を始め、「果は立ち上つて拳を揮い合つた」など。

自分は「小説」とは元来無縁という認識が市蔵にはあつた。又、「三つ巴」の関係が「小説」になる前に、その場から逃亡したとも言ふ。しかしその帰途に既に、「想像」の中で「小説」中の人物に成りおせている彼がいる。先ず、安定した日常的レベルが想定されている。我々が普段生きているいわゆる「尋常」の世界である。それがリアリズムの拠り所となっている。そのリアリズムを逸脱した非日常的レベル、それを市蔵は「小説」と言っている。だが、「小説」の中でそのように生きている自己を「想像」しうることとは、リアルな世界でいつでもそのように成りうる可能性が、彼にはあるということの意味する。「口」と「腹」とは、ここでも一致しない。

平穩な日常を自宅で回復すべく、書棚の整理を試みた彼は、「偶然」、「或文学好の友達」から借りて、「つい返すのを忘れていた妙な書物」をその片隅に見出す。その「独乙」語訳の「薄い小型の本」・「ゲダンケ」については、タイトルドイツの日本語訳も無く、ただ「露西亜物の翻訳」とあるにすぎない。又、その作家の名（レオニード・アンドレーエフ）も、小説中の登場人物名も、その主人公（ドクトル・ケルジエンツェフ）をも含めて、いつさい伏せられている。漱石の意図的な選択である。前者はいわゆる「誤訳論争」の蒸し返しを避けたからであり、後者はその必要なしと判断したからである。だが、ここでは便宜上、主人公の名前のみミニシャルのKで取り敢えず表記する。因みに、「須永の話」に似て、「ゲダンケ」も又ほばKが自己自身を語るスタイルで進行する。

「文学好」でもなく、日頃、小説への造詣が深いとは言えぬ市蔵。そういう彼自身の「ゲダンケ」理解の要約を、以下、摘記する。——Kは或る女に意があつた。が、全く相手にされないのみか、かえつて彼の親友と結婚する。そのことを「根に」、彼は新婚の夫を殺そうと企てる。「但しただ殺すのではない。女房が見ている前で殺さなければ面

白くない。しかもその見ている女房が彼を下手人と知っていないが、「彼を見ているだけで、それより外にどうにも手の付けようのない複雑な殺し方をしなければ気が済まない」。

それを「根に」という把握からも明白なように、市蔵はKの殺人を「復讐」と考えている。この「復讐」の語は現に、その後、二度反復される。Kはその「復讐」を巧妙に成就する。先ず、ある晩餐会に招待されたとき、急に激しい発作に襲われたふりをして、狂人と思えない挙動を演ずる。「同じ所作」をその後、彼は社交場で「二、三度繰り返し」、「発作のために精神に狂いの出る危険な人」との印象を一般に定着させる。しかるのち、いまだ唯一彼を受け入れている親友の家で、その当の本人を、その妻の目前で文鎮を以て「打ち殺し」てしまう。

「胸」の熱を「頭」の威力で抑えるのを常としている市蔵は、日常、この二者の相克を意識している。ところが、Kには「理」と「情」との葛藤は一切なく、なんらの躊躇もせずして一途に殺害へといった。「偉大なる俳優」のごとく、あるいは「尋常以上の頭脳と情熱を兼ねた狂人」のごとく。市蔵にとつて、要するにKは、現実に生きている「尋常」なりアルな人間ではない。「狂人」か「俳優」か。すなわち「嘘」の、虚構の存在にすぎない。彼は思う、自分とは「人間の元来の作りが違う」。

しかし高木への嫉妬が、この先「今の数十倍に烈しく身を焼いたら」、とさらに「三つ巴」の状況が激化した場合を仮定して、その想像の中に没入したとき、終には以下のように考えるに至る。――僕のように平生は頭と胸の争いに悩んで愚図ついているものにして初めてこんな凶行を、冷静に打算的に、かつ組織的に、逞しゆうするのだ、と。殺人とは無縁と思ひ込んでいた、彼の自己認識の《嘘》が、思いがけず彼自身によつて暴かれてしまう。Kのように殺人へといったるのは《嘘》であつて有り得ず、自分の方にこそ殺人者と成り遂せる資格がある。そう考えたとき、彼は「変な心持に」襲われ、千代子の面前で、高木の脳天に重い文鎮を骨の底まで打ち込む。そのリアルな白昼夢を「大きな眼を開きながら」見る。そして驚く。

我々の住む日常の世界の裏側に在る、新たな世界を凝視し、それに表現を与える。その志向性においては、おそらく「ゲダンケ」と「須永の話」は共通している。いつ表に反転するか解らない裏側。その戦慄と恐怖。

しかし、市蔵は考える。小説中のKは虚構にすぎず（つまりは、実在しえず）、その小説（「ゲダンケ」）を小説中で批評的に読む市蔵自身が逆に、自己の現実の虚構性を認知せざるをえない羽目に陥る。つまりは、己の裏側に潜む、可能態としての実在を認知せざるをえない。小説の批評としての小説、そして、その小説を批評的に読む読者。七話から構成される連作は、それぞれ後の話が、濃淡の差こそあれ、前の話の批評（読み解き）として在る。そのメタ・フィクションとしての構成意識は、五話自体の内的な仕組みに最も鮮明である。現代人には自己像を明確に結ぶことは困難である。次から次へとメタ的に（場合によっては内へ内へとぐるを巻くように）考えざるを得ない。自己自身のことも、他者のことも、ゆえに結着するところがない。現代人に宿命的な不安の根源がその一点にあり、市蔵はその一典型として存在する。

## 2

記述のとおり、市蔵はドイツ語訳で「ゲダンケ」を読んだ。原作はロシア語。その最初の日本語訳は、明治四十二年六月、上田敏によつて出た。小説のタイトルを「心」とした。ただし、フランス語訳からの重訳である。その翻訳については、発表後すぐに（明治四十二年七月）「無名通信」（注1）誌上に痛烈な批判が掲載された。題して「翻訳界の恥辱」。その論難の詳細については、ここでは問題としない。ただ一点、タイトルの是非についてにのみ絞る。論争の経緯については、剣持武彦氏の的確な要約がある（注2）。以下、それを引く。——上田敏の訳業『心』を批評した無名子はロシア語の知識もある人と思しく、まず冒頭で「思想」（ロシア語「ムイスリ」）↓フランス語

pensee)を「心」と訳したことを非難する。

本文と関係の無い、単に標題だけの事ならば訳者の都合で変へても差支ないし、又変へた方が邦人に移りの可い場合もあるが、何時でも然うだと云ふ訳には行かない。取分け此作などは元々思想即ち自由思想を象徴化したものでこれが為に作者が特に「思想」と云ふ標題を附したのであるから、之を勝手に「心」と直しては、他の場合と違つて作全体の意義を没却することになる。

敏はこれに対して、「小生の翻訳」（読売新聞／明治四十二年八月一、二日）を書き、「思想」を「心」と訳したのは、「種々勘考の上（中略）多少の苦心を経ての事」と弁明。だが、翻訳の一般論を述べたにすぎず、その訳出の理由に明確には言及していないがゆえに、折角の反論の機会をつかみながら、有効性を持ち得ていない。無名子の「小生の翻訳を読んで上田敏に答ふ」（「無名通信」明治四十二年八月十五日）を以て、この論争は終わる。彼、いわく、「日本語にした所で思想と心とは大変な相違である。たとえ上田氏の智を以て如何程勘考しても思想が心と成りつこはあるまい」。

どうも敏の方が分が悪い。その敏の擁護を劍持氏は試みる。「ゲダンケ」を「心」の絶対視の招いた悲劇、と敏は捉えた、と。ケルジェンツェフは自我絶対主義者であつて、自らの内心の自由を絶対視する、その自由な「心」が悲劇を招いている。「心」の在り様が根本である。そういう判断の上に、敏は「心」と訳した、と。だが、「心」の、あるいは「内心の自由」を基礎とした、「自我の自由の証明」としての「心」の「絶対視」、というのは、それこそ「思想」であつて、その「思想」を自己に許すというのも、又「思想」である。氏の弁明は成立してはいない。だが、その敏擁護の末尾に次の一文がある。——しかしケルジェンツェフにおいては心の自由の思想が彼自身の心を殺してし

まつた。

自己の思想を信じ、その信ずるがままに、その思想を実行しえたのであれば、心は満ち足りてしかるべきはずである。なんの異論も「頭」にはない。しかし心は妙な具合になる。以下、「ゲダンケ」本文の若干の検討を必要とするが、引用はすべて上田敏訳を用いる（注3）。——ケルジエンツェフの内部に、殺人前には全く思いもしなかつた変容が起こる。「とても言表することが出来ぬ」「恐怖」が、「一刻の休息も無く」彼を「苦しめ」るようになる。あるいは、「自分で自分が解らなくなる」ような、「物狂はしい」「恐しい」寂寞に襲われるようになる。そうして、ほんとうの狂気が、彼に忍び寄つて来る。「頭」と共振するようには動かぬ「心」。「頭」（「思想」）とは裏腹に生動して止まぬ、その殺人後の不可思議、不可解な人間の「心」。そこに力点をおいて捉えたがゆえに、敏は「心」と訳した。となれば、敏擁護は初めていささかの説得力を持ちうる。幸か不幸か、「心」は「頭」より大きい、と。

だが、結局のところ、ケルジエンツェフの思想が親友を殺し、剣持氏が言うように、はては「彼自身の心を殺してしまつた」。これは「思想」による自と他への殺人劇である。彼にそもそもそのような「思想」を胚胎させたのはなにか。そこには彼の強烈な自尊心がかかわっている。彼は述べている、殺人に自分を赴かせたのは、「無論嫉妬では無い」。「復讐かしら」と言いつつも、それを全面的に肯定するわけでもない。他人は殺人の結果から見て、復讐と思ふかも知れぬが、そうではない。彼が女に愛の告白をして結婚を申し込んだとき、女は笑つた。「永い間、笑ふの、笑ふの、思ふ存分に笑つた」。女は「あの笑で眞に此所の感情を害した」。にもかかわらず、彼はそのとき微笑してしまつた。そして、思う。「自分が微笑したのはどうしても堪忍ならぬ」。自分が深く傷つき、恥辱の中にいるとき、怒りでも、憎悪でも、悲しみでもなく、追従するような、ただ呆けたような「微笑」を以て、そこに立つていた。なんという凡庸の極み、なんという力の欠落、無力の極み。その存在せんとする自己の力の欠損し払底したその底から、浮上しなければならぬ。彼は言う、「殺したのは、単に自分の力を試して見たかつた」からだ、と。傷つき、衰弱し

た自我（自尊心）の主張、そしてその回復。殺人を敢行させた彼の（動力）はそれだ。徹底して、自我に始まり、自我に終わっている。そこには彼の実行を後押しする、時代の思潮に加速化された彼の思想がある。「自分には凡てが許されてゐる」と。アンドレーエフはドストエフスキーの影響を強く受けた（注4）。その結果、ケルジエンツェフには『罪と罰』のラスコーリニコフの面影があるし、彼がイヴァン・カラマゾフの思想圏内に在ることも明白である。イヴァン言わく、もし神が存在しなければ、すべてが許される（注5）と。

同じような三角関係と見えて、市蔵を駆り立てる力の始源は、ケルジエンツェフが否定した「嫉妬心」であつた。そもそもからして二人は違う。市蔵は次のように語る。

もし千代子と高木と僕と三人が巴になつて恋か愛か人情かの旋風つむじかぜの中に狂うならばその時僕を動かす力は高木に勝とうという競争心でない事を僕は断言する。それは高い塔の上から下を見た時、恐ろしくなるとともに、飛び下りなければいけない神経作用と同じ物だと断言する。結果が高木に対して勝つか負けるかに帰着する上部からいえば、競争と見えるかも知れないが、動力は独立した一種の働きである。しかもその動力は高木がいさえしなければ、決して僕を襲つて来ないのである。僕はその二日間に、この怪しい力の閃を物凄く感じた。

自分を動かす力は「断じて」「競争心でない」、市蔵はそのことを念を押すように、強調し反復する。その意味は、自分には自我主張的な思惑がいつさい無いということだ。彼の行為はこの時、彼自身の自由意思の発動とは切り離されて在る。だから、「動力は全く独立した一種の働き」というのである。

「三つ巴」の関係性の動き次第で、自己の存在の在り様が変化する。その変化させる力の有無は勿論、発動した場合のその力の方向性と強度など、いつさいが予則不能、かつ、制御さえ不可能であつて、彼はその「力」に強いられ

るようにして存在するほかない。彼の「動力」は彼の自尊心でも「思想」でもなく、彼自身の〈自由意思〉を超えた場所から発している。ケルジエンツェフの「破滅」は、彼の理知（計画）の命ずるとおりであり、「周密なる思慮」による実行でしかないが、須永の場合は、対他的関係性の、いわば渦潮の満ち引きの結果にすぎない。ケルジエンツェフは「頭と胸の争いに悩んで」はいない。この二人は決定的に違う。

文学に興味を解しないと言う市蔵が、そこまで自他の違いを意識しているわけではない。だが、漱石は充分に承知していた。そうでなければ、「ゲダンケ」を踏まえながら、それは違うという主張の下に、市蔵を造形する必然性が出て来ない。『彼岸過迄』執筆当時、アンドレーエフは世界中で読まれていた。それはブームというべき現象で、日本もその例外ではなかった（注6）。流行のアンドレーエフの作と比較・拮抗させることで、漱石は自他の人間観の相違をいつそう鮮明にしつつ提示した。自分はそうは考えない、こう考える、と。

漱石全集には仮に『模倣と独立』という演題が付けられた講演記録がある。それは『彼岸過迄』の連載終了（一九二二年四月）から約一年八カ月後のものである。その講演の終わりに、漱石はこんなことを言っている。——日本人はロシアの小説等非常に恐れるがそんな理由はない（中略）、文学者は西洋に比べられぬ等云ふが、たゞ縦に読むのを横に読むのが偉いやうに見えるのであつて、自ら軽んずるものである。自分がオリヂナルなものを持ち乍ら西洋が偉いとは理由が分らぬ、彼等をやつつけるまでには行かぬからせめてイミテーション丈はせぬやうにしたい（中略）、そして蒸し返しでなく本当の新しいものにならない、要するに、そちらの方が今の日本で大切なのである、私は個人として新しい自分を表はし、それと共に人間を表はすが、何れと云へば、人の後に立つより、一人がいゝと思ふ許りでなく、そちらが日本のために必要だと思ひます。

同じく「三つ巴」を生きる人間像を踏まえながら、全く類を異にする人間像を描く。そこには彼我の人間観についての、漱石の透徹した認識がある。このことは、自分は何々派の作家というような固定した色に染めつけられる者で

はないし、そんな必要をも認めない。「ただ自分は自分であるという信念を持つている」。あるいは、「ただ自分らしいものを書きたいだけである」、という漱石自身の、『彼岸過迄』について「における宣言を想起させる」。

高木殺害の白昼夢を見る直前、市蔵は「変な心持に襲われた」。そのときの彼自身を、彼は次のように説明している。

——その心持は純然たる恐怖でも不安でも不快でもなく、それらよりは遙に複雑なものに見えた。が、纏って心に現れた状態からいえば、丁度大人しい人が酒のために大胆になつて、これなら何でも遣れるという満足を感じつつ、同時に酔いに打ち勝たれた自分は、品性の上において平生の自分より遙に墮落したのだと気が付いて、そうして墮落は酒の影響だからどこへどう避けても人間としてとても逃れる事は出来ないのだと沈痛に諦めを付けたと同じような変な心持であつた（二十八）。

「襲われた」といい、「とても逃れる事は出来ない」といい、このときの彼はやはり、「独立した一種の働き」としての「動力」に支配されている。彼は彼自身の自由意思の支配下に存在してはいない。「動力」の出現は、それが本来、因果律や論理（別言すれば時間的なもの）の束縛から自由な存在であるがゆえに、予知することができず、又、意識を超えた存在であるがゆえに、意識を以て捉えることはできず、もっぱら象徴とか比喩でそれに接近しつつ語るほかない。よつて、「動力」についての記述は晦渋になるほかない。繰り返して言うが、彼を支配する決定的な「力」は、彼の意識を超越した領域に発している。その「力」の下に、市蔵が「変な心持」になつたとき、彼は既に尋常の識域を超えて、狂気の人と言つていい。正氣から狂気への移行は他動的であつて、計りがたい。人は意識的に狂人になるわけにはいかない。強いられるようにしてそうなる。その強いる「力」への畏怖が市蔵にはある。だから、高木の脳天に文鎮を打ち込んだ「夢」を、「大きな眼を開きながら見て」、「驚いて立ち上つた」のである。そして、「いきなり風呂場へ行つて、水をぎざぎざと頭へ掛けた」のである。この畏怖は漱石のそれでもある。自我（意識）を超えた「力」への鋭い感受力を欠落した作家に、市蔵のような人間への発想力はない。漱石は人間を（こころ）として捉える。だ

から、ケルジェンツェフのような人間は創造しない。ゆえに、彼を主人公とする小説の日本語訳の「標題」としては、「思想」が正しい、と漱石は考えたであろう。だが、かつての誤訳論争の再燃ともなりかねないことを回避して、「ゲダンケ」で通した。だが、そのメタ小説としての五話の記述から判断すれば、暗黙のうちに、漱石は自らの立場を明示していた（注7）。

### 3

市蔵の出生には秘密があつた。彼は母の子ではなく父と小間使いとの間にできた子であつた。彼がその秘密の真実を知るのは、大学卒業の間際であるが、幼少時より、彼の人生に翳りを与えた最大の要因であつた（注8）。自他ともに「偏癡」（一）と認め、自ら「陰性の癩癩持」（二十八）と言う。物事を表から裏から、又その裏からと幾重にもつづけて終わることのない、その身についてしまった癩。時には、その場の人々の空氣に同調して、あえて陽気に振る舞おうとするが、自己の言動に「偽りの影」を意識し、「本来の自分を醜く彩つて」といと自覺したりする。要するに、陰翳の人、自意識の人である。そういう彼が、——「その内で自分の気分と自分の言葉が半紙の裏表のようにびたりと合つた愉快を感じた<sup>おぼえ</sup>覚がただ一遍ある」（九）。それは『彼岸過迄』全七話を通じて、市蔵が真に「愉快」を感じている「ただ一遍」の場面である。

ある日、市蔵が千代子の家を訪ねると、他には誰もいず、風邪を引いた彼女だけが留守居として残っていた。「病気のせいか何時もよりしんみり落付いて」いる千代子に、市蔵は「自から」優しく接する。他者の一切から隔絶した二人きりの時空間に、平生とは違う二人の時空間が出現する。二人は元來従兄妹同士で、「殆んど一所に生長したと同じような自分たちの過去を振り返」る。千代子の記憶の方が豊富で肌理が細かい。彼女は十二、三歳の時、市蔵が

描いてくれた画を手文庫に、いまだに大切に五、六枚持っていた。それは赤い椿だの、紫の東菊だの、単純な花卉の写生にすぎなかったが、時間と労力を厭わない、驚くべき「綿密」さで仕上がっていた。千代子は言う、「妾御嫁に行く時も持つてくつもりよ」と。彼女はさらに、もう直に嫁に行くのだと言い、「まだ極つた訳じゃないだろう」という市蔵に対し、「いいえ、もう極つたの」と「明らかに答え」る。そのときの市蔵の反応は以下のごとくである。

——「今まで自分の安心を得る最後の手段として、一日も早く彼女の縁談が纏まれば好いと念じていた僕の心臓は、この答とともにどきんと音のする波を打った。そうして毛穴から這い出すような膏汗が、背中と腋の下を不意に襲つた。千代子は文庫を抱いて立ち上った。障子を開けると、上から僕を見下して、「嘘よ」と一口判切いい切つたまま、自分の室の方へ出て行つた。(中略) 千代子の嫁に行く行かないが、僕にどう影響するかを、この時始めて実際に自覚する事の出来た僕は、それを自覚させてくれた彼女の翻弄に対して感謝した。僕は今まで気が付かずに彼女を愛していたのかも知れなかった。或いは彼女が気が付かないうちに僕を愛していたのかも知れなかった。——僕は自分という正体が、それほど解り悪い怖いものなのだろうかと考えて、しばらく茫然としていた」(十)。

自己の「正体」は「解り悪い」し、かつ「怖いもの」だ。高木の脳天に重い文鎮を打ち込みかねない。しかしこのとき、彼の「正体」は全く別様の人として立ち現われて来る。「茫然」たる面持ちの彼の元へ、千代子が急ぎ足で戻つて来て、一緒に電話を掛けてくれと頼む。風邪で声が出ないから、わたしが小さな声で言うのを、向こうに大きな声で送話してくれればいい。聞く方はわたしが聞く。市蔵は訳も分からず、ただ取り次ぎ役だ。——「それでも始めの内は滑稽も構わず、暇が掛るのも厭わず平気で遣っていたが、次第に僕の好奇心を挑発するような返事や質問が千代子の口から出て来るので、僕は曲んだまま、おいちよいとそれを御貸と声を掛けて左手を真直に千代子の方へ差し伸べた。千代子は笑いながら否々をして見せた。僕は更に姿勢を正しくして、受話器を彼女の手から奪おうとした。(中略) 取ろうとする、取らせまいとする争いが二人の間に起こつた時、彼女は手早く電話を切った。そうして大きな声

を揚げて笑い出した（十）。

千代子の笑いは、笑い以外にいつさいの目的を持たない。真に純粋な笑いである。いわば（絶対的）な笑いであり、彼女はそのとき、生き生きとした生の時間を生きている。彼女にもそれは最も「愉快」な時であつた。そのような（時）を誰とでも煩つ訳にはいかない。一方、市蔵はこのときどのような心持ちであつたか。彼は一言半句も語つてはいない。千代子の電話室での記述されないセリフと同じく、空白のままである。この語られざる空白。だが、「ただ一遍」経験した「愉快」と予め述べていたし、又、次のように言う、「二人の情愛を互いに反射させ合うためにのみ眼の光を使う手段を憚らなかつたなら、千代子と僕とはその日を基点として出立しても、今頃は人間の利害で割く事の出来ない愛に陥つていたかも知れない」と。

電話事件の内実は、と言えば、なにも無い。なんらの論理もないし、意味もない。まるで幼い子どもたちの無邪気な戯れにすぎない。ひたすら空白なのである。そこにいつまでも響いているのは、千代子の〈笑い〉のみ。その論理（意味）以前の、恐らくは至純とも言ふべき行為は、意識ではなく、彼らの存在そのものに発していた。だから、この上ない生命感の昂揚があつた。彼らはこのとき確実に、生命の只中に生きていた。そうでなければ「愛」などとは言わないだろう。人は恐らくそのような生命的経験を根拠に据えて、そこから真つ直ぐに、己の生を築くべきなのである（注9）。市蔵は愛を自覚し、愛の可能性の中にいた。だが、「割く事の出来ない愛」の可能性に言及した直後に、次の記述が来る。「ただ僕はそれとは反対の方針を取つたのである」。

彼の「方針」は、彼自身の生命への根柢からの裏切りであつた。なぜ、そういうことになるのか。彼の内部に強固に存在する、「自尊心の強い父の子」（七）としての、父親譲りの矜持がある。千代子の両親とともに、娘と自分の結婚を望んではいないという市蔵の判断。とすれば、無理に彼女を貫く訳にはいかない。あるいは、真つ直ぐで行動的な千代子と自分とは到底巧くないかない。彼女は必ずや自分に失望するという判断。一の判断にはじつは根柢らしい

根拠はなく、彼の「僻み」からの思い込みにすぎないのかも知れぬ。又、二の判断は彼の生きる態度次第で、取り越し苦労というべきかもしれぬ。いずれにせよ、彼の千代子への対応は、ひたすら消極的・否定的である。まさに「陰性」というほかない。にもかかわらず、「三つ巴」の關係においては、苛烈な「嫉妬心」に襲われ、高木殺害を「夢」にまで見る。既述のとおり、彼女を失うことへの極度の恐怖からである。なぜ彼女の喪失が、それほど恐怖（脅威）となるのか。市蔵の救いの可能性がそこにしかない、そのことを彼自身の存在が深く了解しているからである。だから、喪失に対して激しく抗う。だが、彼の意識はそのことを解つてはいない。だから、自尊心とかあれこれの考え（思想）に拘泥して埒があかないのである。

彼の存在と意識は乖離している。「須永の話」の終章（三十五）は、あの千代子が泣きながら訴える場面で閉じられる。そこに至るまでの経緯は省略するが、とどのつまり、彼女は須永を「卑怯」だと言つて非難する。——「貴方は卑怯です。徳義的に卑怯です。（中略）貴方は妾の宅の客に侮辱を与えた結果、妾にも侮辱を与えたのです」。以下、次の応酬で終わる。

「侮辱を与えた覚はない」

「あります。言葉や仕打はどうでも構わないんです。貴方の態度が侮辱を与えているんです。態度が与えていないでも、貴方の心が与えているんです」

「そんな立ち入った批評を受ける義務は僕にないよ」

「男は卑怯だから、そういう下らない挨拶が出来るんです。高木さんは紳士だから貴方を容れる雅量がいくらでもあるのに、貴方は高木さんを容れる事が決して出来ない。卑怯だからです」

市蔵は意識のレベルで、「言葉や仕打」の上で「侮辱」を与えてはいないと考え。しかし、高木との関わり（交渉）を極端に避ける彼の「態度」やそれを生み出す「心」が、事実の上で「侮辱」を与えている、と千代子は言う。彼女の主張が正しい。彼女は知らぬとはいえ、「侮辱」の集約的表現として、白昼夢の惨劇がある。これ以上の「侮辱」はあるまい。高木の存在自体を消滅させている。だがそれらは、市蔵に言わせれば、彼の意識的活動ではないのだから、彼の責任の範疇外である。「態度」や「心」にまで立ち入るなと言う訳である。市蔵は「意識」を、千代子は「存在」そのものを問題にしている。言うまでもなく、罪は意識ではなく、存在そのものに属している。その存在における罪を導くのは、自尊心（別言すれば傲慢）と「思想」ということになる。暴力（死）と愛（生）と、二つながらの可能性が「心」（存在）にはある。自尊心と「思想」を超越することは、人には困難である。だから、救いに至ることも又困難である。「愛」の可能性を放棄し、市蔵が全く別の方向へと舵を切り変えたがゆえに、「須永の話」は、永遠に空白のままなるその空白の周囲を、ぐるぐるとぐるを巻くように廻る「話」となる。

（注）

- 1、この注釈としては、以下、剣持武彦氏の論文から引く。——この雑誌は明治四十二年四月に創刊され、毎月一日、十五日に発行する評論誌であった。その名の如く、すべて無署名であり、社員の名も一切伏せられている。（中略）匿名による利点を活かして、齒に衣をきせぬ批評活動しようという試みであった。（夏目漱石「こころ」と上田敏訳・アンドレイエフ『心』（『個性と影響——比較文学試論』所収、昭和六十年九月桜楓社）
- 2、前掲書（剣持論文）。
- 3、定本上田敏全集・第二巻、教育出版センター・昭和五十四年二月所収に拠る（初出である単行本『心』（春陽堂）収録本文は未見）。
- 4、前掲書（剣持論文）に拠る。
- 5、『カラマーゾフの兄弟』（一八七九―一八八〇年）の中のイヴァン・カラマーゾフのことば。

6、『ロシアの影——夏目漱石と魯迅』（藤井省三・一九八五年四月、平凡社刊）の中に、アンドレーエフについての以下の記述がある。「競って翻訳されるようになるのは一九〇五年以後のことであった。（中略）魯迅は日本のアンドレーエフ・ブームの渦中にいたというよりも、日本の文学者と競い合うように翻訳活動をしていたというのがより適切であろう」。

7、同じ小説を、のちにアンドレーエフ自身が戯曲化している。熊沢復六のその日本語訳の「標題」は、因みに、「思想」である。（『世界戯曲全集』第二十五卷露西亜篇・近代社、昭和二年七月刊、所収）

8、一例のみ挙げると、父親は市蔵がまだ子どもの頃に亡くなるが、その葬式の日、母親が彼に言ったことば、「お父さんが御亡くなりになっても、御母さんが今まで通り可愛がつて上るから安心なさいよ」（三）。

9、このような〈思想〉を、森有正は、『ドストエーフスキーにおける『自由』の一考察』（『世界文学』一九四八年九月号）の中で繊細かつ重厚に展開している。のち、『ドストエーフスキー覚書』一九五〇年一月、創元社刊所収）。

☆漱石文の引用は、『彼岸過迄』はワイド版岩波文庫、『模倣と独立』は「漱石全集」岩波書店刊（全二十九巻本）第二十五巻に拠った。